

【実践報告】

教育実習Ⅲ（幼稚園）の現状と課題 ～実習生のアンケート調査から～

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 杉山 浩之 准教授 牧 亮太 講師 長澤 希

I はじめに

教育実習Ⅲ（幼稚園2週間）は、本学では4年生が行う実習である。2年生の観察実習（前期3日間終日）から始まり、3年生の幼稚園実習（2週間）、保育所実習（10日間×3回）を経て、本学における教員養成として最後の実習となる。4年生はこの実習を終えて、それぞれの進路に向けての就職活動に入る。このような意味において、保育者の卵として最終段階となる実習であった。これまでの実習で培った実践力を大いに発揮し、磨きをかけると同時に、より質の高い課題を発見する機会でもある。

2018年度は、5月28日より2週間わたり、出身園や郷里の幼稚園で実習を行った。幼児教育コースの47名の学生が実習を行い、実習後にアンケートを実施した結果、38名の学生が回答（回収率81%）をした。以下、アンケート項目に従って、分析（%は小数点第1位を四捨五入した）と考察（批評）を示し、教育実習の現状と課題を明らかにする。

II アンケートの分析と考察

(1) 手あそび

実習中に手あそびを行った学生は、38名中32名（84%）である。手あそびを行った頻度、保育者からのアドバイスの有無を、図1・図2に示す。

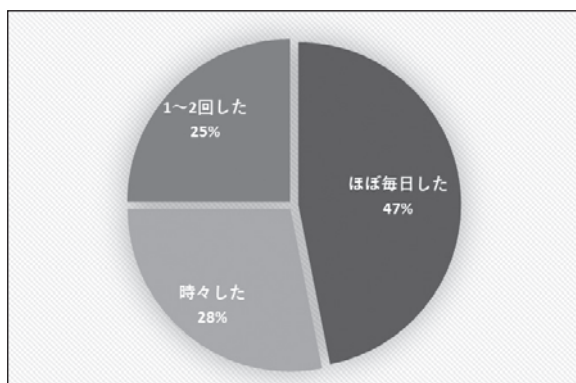


図1 実習中に手遊びを行った頻度

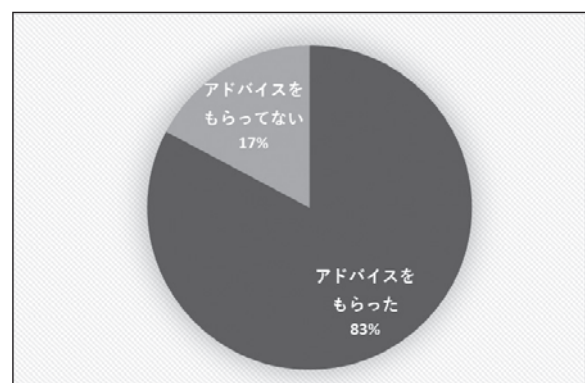


図2 保育者からのアドバイスの有無

手あそびを「ほぼ毎日した」学生は15名（47%）, 「時々した」学生は9名（28%）, 「1~2回した」学生は8名（25%）であった。また、手あそびの実践後に保育者から「アドバイスをもらった」学生は24名（83%）, 「アドバイスをもらってない」学生は、5名（17%）であった。

手あそびは部分保育・設定保育を行う場合、導入として用いられることが多い。優しい声で歌い、落ち着いた気持ちになって終わることで、次の部分保育の説明や保育者の話を受け止めることができる。手あそびを知っていれば、保育のちょっとした時間楽しく遊べるだけでなく、挨拶や手洗い、歯磨きなどの基本的な生活習慣を身につけさせることができる。また、次の活動への意欲を高めたり、季節を感性豊かに感じられたりと、日常の保育で子どもの意欲や想像力、表現力を育てることも期待できる。

実際に実践した手あそび曲の上位は、図3の通りである。最も多くの学生が実践した手あそび曲は、「はじまるよ はじまるよ」であり、手あそびを実践した学生の約半数がこの曲を挙げていた。さらに、実践した曲の種類は「生活習慣に関する曲」「食べ物に関する曲」「動物に関する曲」「ゲーチャョキパーに関する曲」「ゲーム要素のある曲」と「その他」であり、その分類別の結果を図4に示す。最も多く実践された曲は生活習慣に関する曲であり、これらは実際に子どもの聴く姿勢を導くために使ったり、活動と活動の合間に気持ちの切り替えを行うために使ったりできるものである。続いて多く実践されていた曲は食べ物や動物に関する手あそびであり、子どもたちが興味をもつものを題材にした曲が目立った。一方で、「低年齢児向け」や「指先を動かす指あそび」に関する曲を実践した学生は非常に少ないことが分かった。

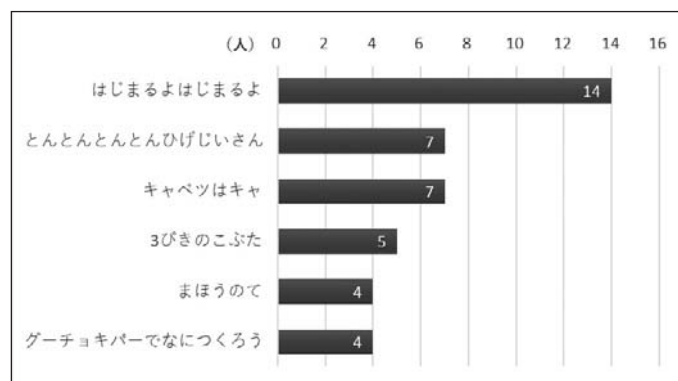


図3 実践した手あそび曲の上位

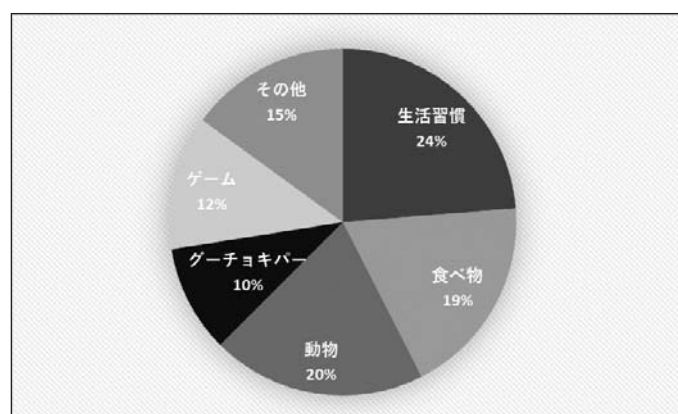


図4 実践した手あそび曲の分類

(2) 絵本の読み聞かせ

実習中に絵本の読み聞かせを行った学生は、38名中34名（89%）である。絵本の読み聞かせを行った頻度、保育者からのアドバイスの有無を、図5・図6に示す。

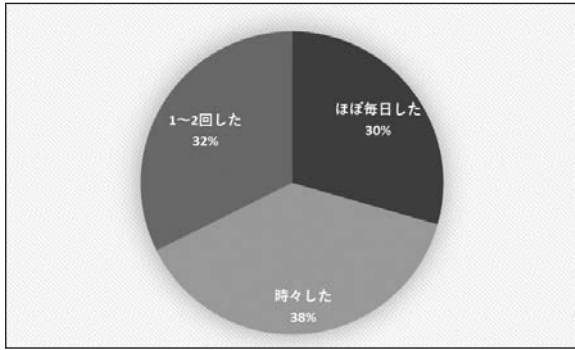


図5 実習中に絵本の読み聞かせを行った頻度

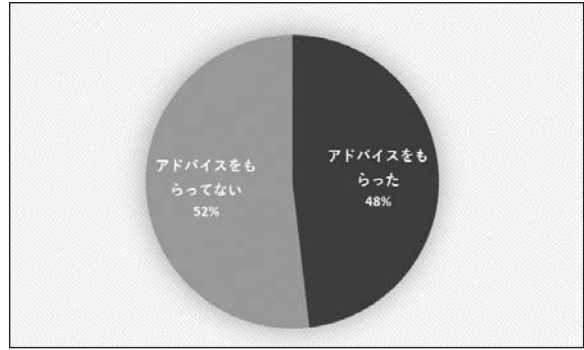


図6 保育者からのアドバイスの有無

絵本の読み聞かせを「ほぼ毎日した」学生は10名（30%）, 「時々した」学生は13名（38%）, 「1～2回した」学生は11名（32%）であった。また、絵本の読み聞かせの実践後に保育者から「アドバイスをもらった」学生は13名（48%）, 「アドバイスをもらってない」学生は14名（52%）であった。

絵本は児童文化の題材として子どもの成長に価値の高いものである。絵本の読み聞かせによって、子どもたちはたくさんの感動を呼び起こし、疑問・探究心の芽生え、イメージの拡がり、充実感をもつなどの経験へと誘うことができる。絵本の読み聞かせは保育現場において重要な活動であることは言うまでもなく、必ず必要とされる技能であるため、2年次から継続して指導を行っている。アンケートの結果によると、約9割の学生が、実習期間中に1度は読み聞かせを行うことができていた。しかし、実施後に保育者からアドバイスをもらった学生が半数に満たなかったことは、懸念すべきことである。先述したように、2年次から指導を行っているものの、絵本の持ち方・手の位置・ページのめくり方・表情など、様々な技能を必要とする読み聞かせは、子どもを前にして初めてその学生の力が見て取れるものである。そのため、現場にいる保育者の視点から学生の評価をいただくことで、学生自身が読み聞かせの技能で足りないことや達成できたことを学ぶことができると考える。今後は、絵本の読み聞かせに関して、保育者からより質の高いアドバイスがいただけるような実習の在り方を検討する必要がある。

(3) ピアノ

実習中にピアノを弾いた学生は、38名中22名（58%）である。ピアノを弾いた頻度、保育者からのアドバイスの有無を、図7・図8に示す。

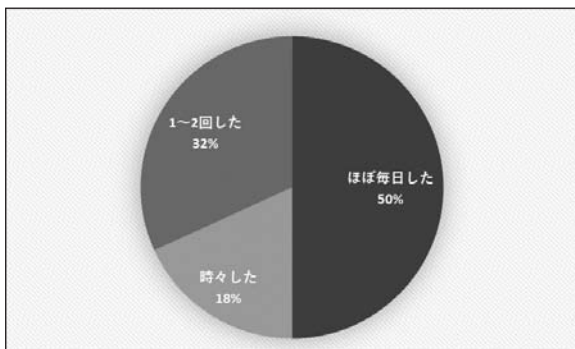


図7 実習中にピアノを弾いた頻度

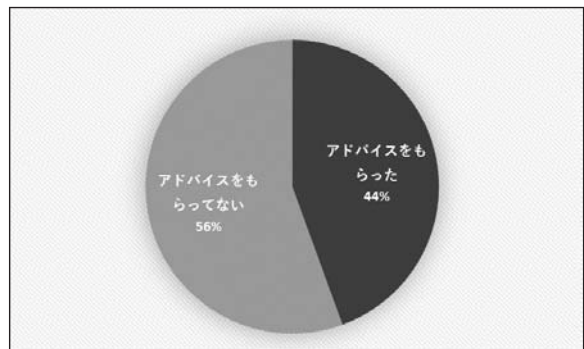


図8 保育者からのアドバイスの有無

ピアノを「ほぼ毎日した」学生は11名（50%）, 「時々した」学生は4名（18%）, 「1～2回した」学生は7名（32%）であった。また、ピアノの実践後に保育者から「アドバイスをもらった」学生は8名（44%）, 「アドバイスをもらってない」学生は10名（56%）であった。

事前にピアノを十分に練習した学生は13名（59%）, 十分な練習ができなかったと回答した学生は2名（9%）であった。また、準備した曲以外を実習期間中に急遽弾くことになった学生が2名（9%）

いた。

図9は、実習中に弾いたピアノの曲数別人数を示す。ピアノを弾いた学生22名の中でも、弾いた曲数にばらつきが見られた。最も多い曲数の9曲を弾いた学生は2名であり、1曲のみ弾いた学生が7名と最も多い結果であった。

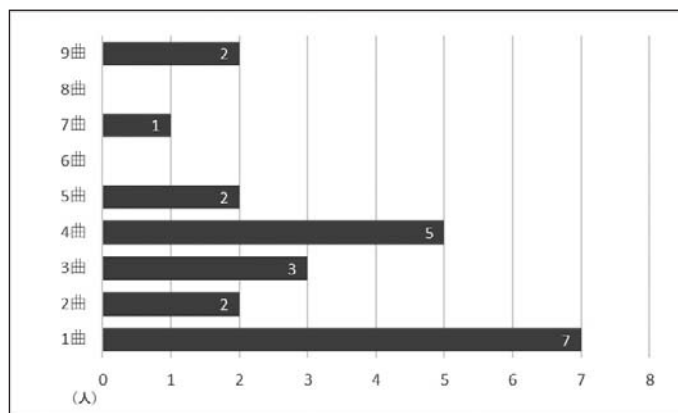


図9 実習中に弾いたピアノの曲数別人数

手あそび（33名実施）や絵本の読み聞かせ（34名実施）に比べて、ピアノを弾いた学生は22名と大きく下回っていることが分かる。また、学生の実習前には、実習先の園からピアノの課題をいただき、練習を重ねている学生が数名いた。しかし、本人は十分に練習したと感じていても、実際に実践してみると思うようにいかなかったケースが振り返りの中で多く見られた。さらに、そもそも練習が十分に足りていなかったと感じる学生もいた。その要因の1つとして、3年次前期以降弾き歌いの授業がないことが挙げられる。学生が自らピアノに向かうことを、継続して取り組んでいくことができるような手立てが必要である。

（4） 設定保育

実習中に設定保育を行った学生は、38名中36名（95%）であった。図10に、設定保育を行った36名の学生の指導案に関する回答を示す。

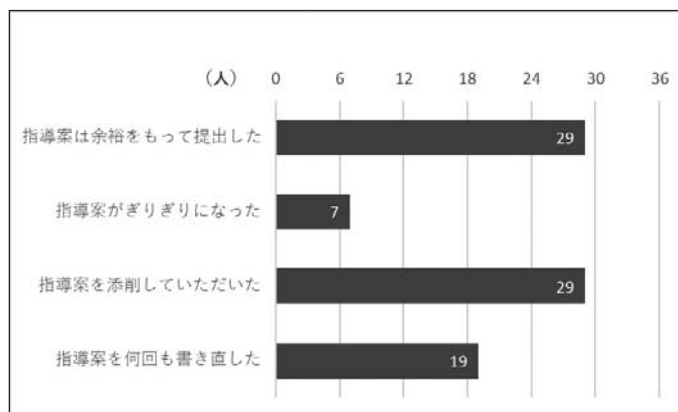


図10 指導案に関する回答

指導案の添削を受けた学生は36名中29名（81%）である。そのうち19名（66%）が何度も書き直しをしていた。

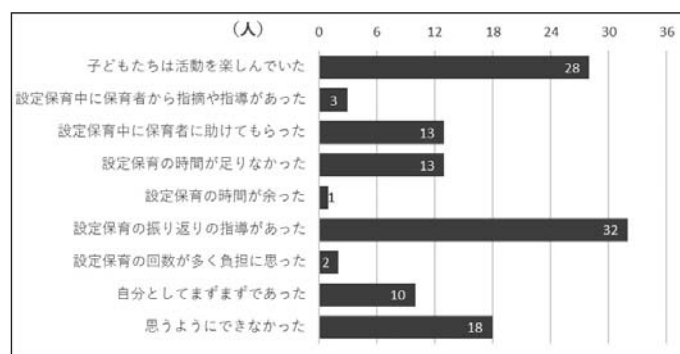


図11 設定保育に関する回答

図11より、「設定保育中に保育者から指摘や指導があった」という学生は3名（8%）、「設定保育中に保育者に助けもらった」という学生は13名（36%）であった。ほとんどの学生が設定保育を行ったが、保育中に助けがあったという回答が3分の1以上あったことは課題であると捉えている。「設定保育の振り返りの指導があった」という学生は32名（89%）、「設定保育の回数が多く負担に思った」という学生は2名（5%）であった。以上のことから、保育者の助けなしでやりきる実践力を身につけておかねばならないはずであるが、十分な実践力に届いていない現状が見える。

また、「子どもたちが活動を楽しんでいた」と感じた学生が28名（78%）いるにもかかわらず、「思うようにできなかった」と回答した学生は18名（50%）いたことから、子どもの活動面以外で思うようにできなかった課題があったことが分かる。

設定保育の時間は、30分から60分であった。そのうち50分以上は14名（39%）であった。

今後は、設定保育が上手くいかなかった学生に対するフォローアップが必要であり、それは教職実践演習における課題として検討していく。

（5） 全日・半日保育

実習中に全日保育を行った学生は3名（8%）、半日保育を行った学生は3名（8%）、全日保育と半日保育の両方を行った学生は3名（8%）であった。

比較的少ないが、全日保育の実習は将来的に考えると必要不可欠な経験である。今後は、できるだけ行えるように園に対して要望するという事も考えなくてはならない。これまで十分な全日保育の事前指導は行われていないので、今後検討の余地がある。

（6） 学生が設定した「目標と課題」の達成状況

図12に、「目標と課題」に関する学生の回答結果を示す。尚、回答は複数選択を可とした。

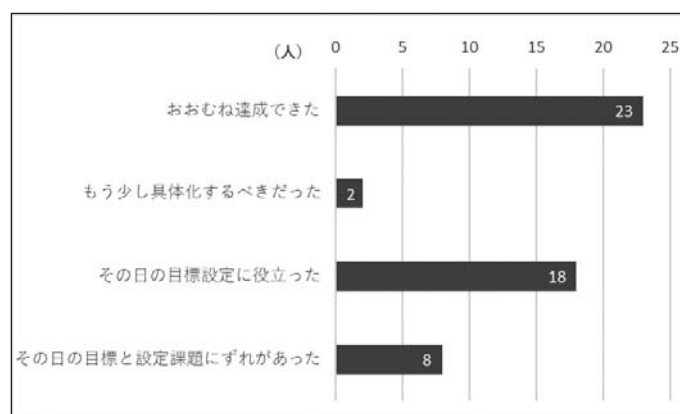


図12 「目標と課題」に関する回答

実習の「目標と課題」は、事前学修において1か月以上にわたり考え、修正を重ねて仕上げたもので実習の成果を高めるためには欠かせないものである。毎日の目標は、そこから引き出し、積み重ねて実習の成果を深めていく。「おおむね達成できた」や「その日の目標設定に役立った」という肯定的回答が多く見られたことは成果であるといえる。「その日の目標と設定課題にずれがあった」と回答した学生が8名いるが、この結果は、ずれを認識できたこと自体は前向きな回答であると捉える。そのずれを少しずつ修正していくことで、より実態に合った保育が実現可能となっていくため、その過程を尊重したい。「もう少し具体化するべきだった」という学生2名に関しては、個別指導を重ねながら育てていく。

(7) 日誌

図13に、日誌に関する学生の回答結果を示す。尚、回答は複数選択を可とした。

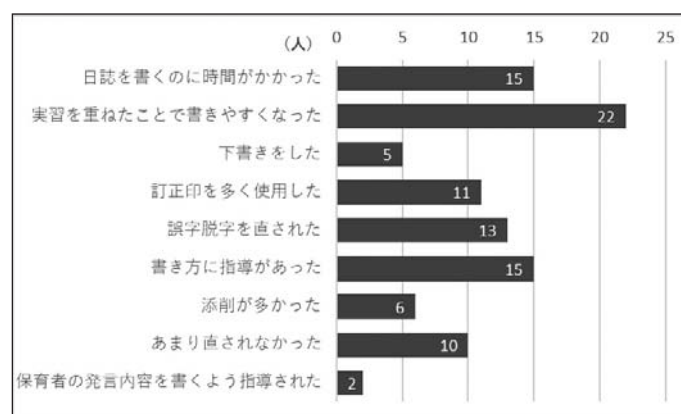


図13 日誌に関する学生の回答

日誌を書く時間は実習を経るにつれて短くなっていく。初めは、4時間程度かかる学生もいるが、慣れるにつれて徐々に下書きせずに2時間以内に書けるようになる。図13からも、「実習を重ねたことで書きやすくなった」と回答した学生が最も多いことが分かる。日誌を書く時間によっては睡眠時間にも影響が出るため、体調管理のためにも2時間以内で書けるような個別指導を含む事前指導も検討しなくてはならない。

(8) 反省会

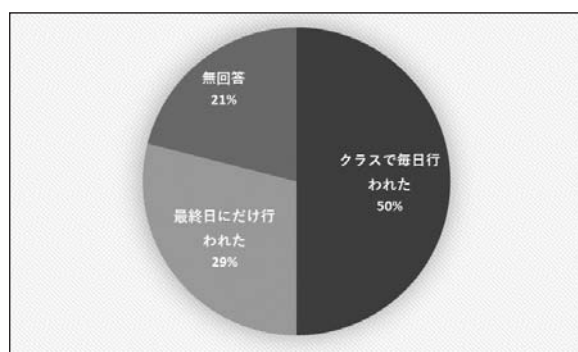


図14 反省会についての回答

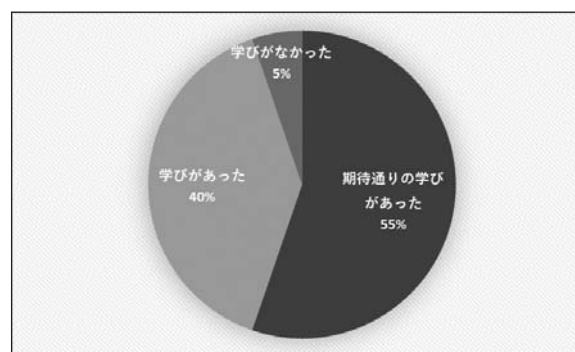


図15 実習全体の学びについての回答

図14より、「毎日反省会があった」という学生は19名 (50%)、「最終日に反省会があった」という学生は11名 (29%) であった。残りは無回答である。

毎日反省会を設けていただいたという学生は半数であった。保育者から毎日指導をいただけるのは大変有難いことである。各園の振り返りに出た視点を共通理解できるよう、学生相互に学び合いのフォ

ローアップが必要である。

(9) 実習全体の学び

図15より、「期待通りの学びとなった」という学生は21名（55%）、「学びがあった」という学生は15名（40%）、「学びがなかった」という学生は2名（5%）であった。

最後の実習が期待通りの学びとなったという学生は半数であった。期待通りとはいかなかったがほとんどの学生に何かしらの学びがあった。一方で、実習経験を肯定的に受け止められなかった学生が僅かにいることに関しては個別面談が必要であり、丁寧にフィードバックしていくことで学びに繋げたい。

(10) 困ったこと

「困ったことがあった」という学生は7名（18%）であった。困ったことに関する記述内容を、表1に示す。

表1 困ったことに関する記述内容

	困ったことの記述内容
学生①	子どもからの言葉に対し、どう返せば良いか分からなかった（A）
学生②	対応や声かけについて悩むことがあった（A）
学生③	何をしたらよいか所々伺うが特にないと返答された（B）
学生④	準備の時間が足りず、指導も少なかった（B）
学生⑤	出勤時間が毎日7時30分だったが担当の先生が出勤されるのは7時40分～45分頃であり、勝手に行動することもできず困った（B）
学生⑥	ほぼいない者として扱われた（B） 子どもの対応をきいても曖昧な回答しかいただけなかった（B）
学生⑦	先生とのコミュニケーションに困った（B）

内容は主に、A：自己の指導力に関わる子どもへの対応と、B：保育者（指導者）との関わり、の2つである。Aに関しては、今後自己の保育者としての資質能力の向上につながる前向きな困りであるとも考えられる。Bに関しては、学生のコミュニケーション能力に課題があるとともに、園側の保育者が学生を育てることへの意識や人材不足にも課題があると予測される。そのため、今後の連携を密に行い、養成機関としての役割と機能を向上していくことが求められる。

(11) 体調

33名（87%）は体調に問題がなかったが、5名（13%）が体調を崩した。風邪、嘔吐、神経性胃炎などであった。睡眠時間は、4時間以下が4名（11%）、4～5時間が9名（24%）、6時間以上は10名（26%）、それ以外は無回答であった。

約1割の学生が体調を崩すということは望ましいことではない。健康管理の指導は大学の初年次から欠かせないことである。実習直前指導においても事前からの体調管理を呼びかけ、体温や体調を記録する用紙を配付して欠かさず指導している。それらは今後も継続して行わなくてはならず、個別面談も欠かせない。

(12) 達成感

十分に「達成感を感じた」という学生は33名（92%）であった。そのうち、具体的記述のあった学生は28名であった。記述内容は、①設定保育を終えたとき、②子どもの変化・成長を感じたとき、③保育者からの指導が充実していたこと、④学びが深まったこと、⑤他者から肯定的に評価してもらったこと、⑥その他、に分類し、図16に示す。

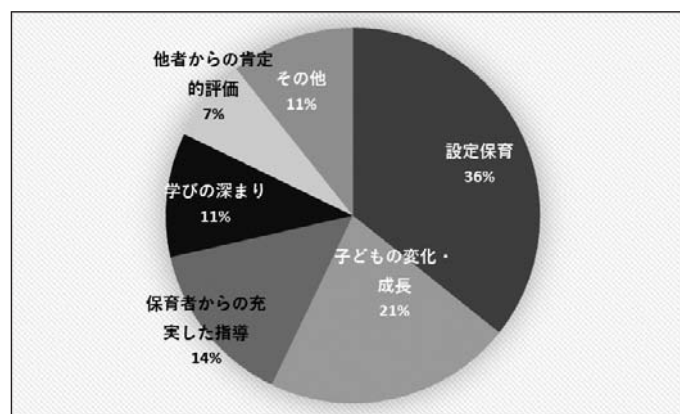


図16 達成感を感じたこと

最も多かった記述内容は、①設定保育に関することであった。具体的には、「毎日手あそび・読み聞かせを行い、全日保育もさせてもらって達成感があった。」や「設定保育で子どもが楽しんでいる様子が見られた。」という声があった。また、「ずっと排泄のお世話をしていた子どもがトイレでできた。」や「自分が行った援助によってのほり棒が降りられるようになった子どもがいた。」など、子どもの変化や成長を感じて、自己の達成感に繋がった学生もいた。さらに、「先生方から多くのアドバイスをもらい、良い面も悪い面も伝えていただいた。」や「先生方の保育に感銘を受けた。言葉かけやかかわり方に学ぶことが多かった。」といった保育者との関わりの中で、達成感を得た学生もいた。一方で、達成感を感じられなかった学生は5名であった。その理由は記述がなかったため、事後指導の中で行う個別面談を通して、達成できなかった原因や今後の課題を明確にしていく。

(13) 就職

就職の声掛け（誘い）があった学生は11名（29%）であった。

実習中に学生が声を掛けていただくことで、本人にとっては励みになり嬉しいことでもある。しかし行き過ぎる誘いがなく、プレッシャーに感じる学生もなかにはいる。保育士不足の昨今、そのような現場の状況を大学側も十分に理解した上で、度を超えるような誘いが慎まれるよう、引き続き園側との連携が必要である。

Ⅲ おわりに

はじめに述べたように「教育実習Ⅲ」は本学における教員養成のなかで最後の仕上げの教育実習である。もちろん保育に完成はなく、保育者の卵である学生の課題は多くあって当然であり、実習は保育者になるための学習のプロセスで到達点ではない。実習を通して現場で学ぶことで、実践的力量を蓄積したり、学生自らが課題を発見したり、社会人としての資質を磨いたりすることが可能となる。今回のアンケートの結果から、学生の多くが達成感を感じられていたが、その達成感は必ずしも期待通りの学びがあることと関連しているわけではなかった。学生自身が「どのような学びを深めたいのか」を改めて整理し、その視点に沿った振り返りを充実させることを通して、自己を見つめ保育者としての可能性を広げていけるよう指導を継続していきたい。そうすることで、次の学習課題を明確にし、成長し続ける意欲の持続やそのための方法を習得することが期待できるであろう。他方で、本論では昨年度のアンケート結果との比較は論じていないが、同様のアンケートを行うことで経年の変容が見られた。特に変容が顕著であった内容は、①実習でピアノを弾いた学生が急激に減少したこと、②反省会を毎日行った園が3割も減少したこと、である。この2つの関する要因として、保育者に毎

日反省会を行う余裕がないことやピアノの技術指導のできる保育者が不足していることなどが考えられる。そういった状況を踏まえた上で、養成機関と実習園との連携が一層必要となってくるであろう。子どもを育む実践的な場である実習が、学生と実習園にとってどちらも有機的に機能していけるよう、養成機関の果たす役割を再検討していく。

IV. 参考文献

- ・植田光子（2015）「「いつ」「どのように」使えるかがわかる！！手あそび百科」,ひかりのくに.
- ・杉山浩之, 善本桂子（2018）「教育実習における実践力修得の実態と課題～4年生幼稚園実習（教育実習Ⅲ）の事例研究～」,広島文教女子大学教職センター年報第6号, pp.71-75.
- ・福岡貞子・磯沢淳子（2009）「保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド」,ミメルヴァ書房.
- ・無藤隆監修（2017）「よくわかるNEW保育・教育実習テキスト改訂第3版」, 診断と治療社.
- ・善本桂子（2016）「教育実習Ⅲ（幼）の報告」, 広島文教女子大学教職センター年報第4号,pp.109-110.